

# 「坊っちゃん」論

— 写本文、あるいは一人称回想への眼差し —

山下航正

はじめに

「坊っちゃん」(明治三十九年四月、「ホトトギス」)研究は、平岡敏夫氏の「作品の事実からいえば帰京して街鉄にとまっている坊っちゃんはウソであり、坊っちゃんは死んだのである。」という指摘以降の、テクストの「暗さ」を重視する論究と、その反論としての「明るさ」を重視する論究とが極点に位置する、振り子運動のような体を表しているのは周知の通りである。このことは、テクストそれ自体が読みの幅を広げる要素を内包していることの現れでもある。

これに関して、有光隆司氏は次のように指摘する<sup>3)</sup>。

一方、内田道雄氏は(中略)作品の「笑い」を「作者の体質の流露」に「還元」するのではなく、「その面白味自体の機構」を説明することこそが重要だとした<sup>4)</sup>。この、「坊っちゃん

語り」を、作者の生理に根ざしたものとすることはなく、意図された機構として捉えようとする内田論文の意味は極めて大きい。だが、「作者が専らしたことは坊っちゃんという二重の存在性をもった性格の造形である」として「笑い」と「批評性」という二重機構を、語り手自身の性格に帰そうとする考えには疑問を持たざるを得ない。平岡氏も、作品の暗さを語り手の暗さとして読解したが、暗さにせよ機構の二重性にせよ、それを語り手自身の性格と直結させる解釈には従えない。むしろ、「語り」の機能を巧妙に包摂した、作品世界の構造それ自体のうち、明るさと暗さという二重性の秘密を探るべきではないか、というのが私見である。

(傍線は引用者による。以下同。また、傍点は本文による。)有光氏は、先ほど触れた平岡氏の論究を踏まえつつ、その傾向に疑問を投げかけ「笑い」に注目する内田氏の言及も視野に入れ、

「坊っちゃん」における「明る、さと暗さ、という二重性の秘密を探る」と述べている。しかし、論の後半に存する「坊っちゃん」という作品は、その深部において悲劇として読まれることを望んでいるのである。」や「悲劇のための有効な方法」という箇所を見ると、有光氏自身も「悲劇」＝「暗さ」を優位に見ている観がうかがえる。

本稿は、「坊っちゃん」というテキストに内包される、読みの幅を広げる要素を明らかにすることを目的とする。まず、有光氏の言う「明る、さと暗さ」という二重性の原因の一つを、テキストにおける語りに見出し、分析する。そして、それに対して作家漱石が抱いていた意識についても論じる。

## 一 語りの機能

まず、「坊っちゃん」における語りに注目したい。語り手である「おれ」は、四国へ数学教師として赴任し、そののち帰京して清の死を経験した後の「現在」から、幼年時代を経て清の死に至るまでの自己を語っている。この語りから、このテキストが一人称回想形式によることが指摘できる。また、四国への到着（二章）から四国出立の直前まで（十一章）赤シャツも野だも訴へなかつたなあと二人で大きに笑つた。」の語りが、「船頭は真つ裸に赤ふんどしをしてくめてゐる。野蛮な所だ。」（二二）、「船縁から覗いて見たら、金魚の様な縞のある魚が糸にくつついて、左右へ濛いながら、手に応じて

浮き上がってくる。面白い。」（五）、「夫れ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘は未だに机の上に乗つて居る。ほこりだらけになつて乗つて居る。」（八）など、現在形や独白めいた読者への語りかけが頻出するのに対し、幼年期から四国出立までを明らかにする一章と四国出立以後の十一章末尾における語りでは、それらが少なく、「成程碌なものにはならない。御覽の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る許りである。」（十一）、「山嵐とはすぐ分れたがり今日迄逢ふ機会がない。」（十二）、「清の事を話すのを忘れて居た。」（同）というように、語る「現在」と語られる「過去（の自分）」を意識したものになっている。

この点に関し、小森陽一氏の言及がある。<sup>3)</sup>小森氏は、「第一章と末尾」に存する「……から……した」という表現は「語る時点での『おれ』＝語り手が、聞き手に向かって行う自己同定のための理由づけ」であり、対する「二章以後」での語りは「語られる『おれ』のそれ（意識——山下注）と明確には分節化され」ない「語られる時点のへいま・ここ」に即した語り」であるとした上で、次のように述べる。

そうすると、当初語る時点での聞き手に対する自己同定を

めざした、自分の行為や思考についての理由づけが、その行為や思考が実際に向けられていた場面内の他者（赤シャツ・野だい

こ・狸など)への一見内語化された反駁の様相をも呈することになる。しかも、「おれ」は二章以後の会話場面の中で、他者から自分の行為や思考の非常識性と非論理性を問いつめられ、「……から……した」という調子で受けこたえをしているのである。つまり、聞き手として語り手の主観的で単純なものの方を通して赤シャツ・野だいこ・狸等の誇張された俗物ぶりを笑う読者は、その語り手の単純さを笑う読者としての潜在的意識の顕在化した型をそれと意識せず笑っていることになる。

小森氏が説くのは、「第一章と末尾」と「二章以後」での語りの位相に起因する、読者の笑いの二重性である。すなわち、「二章以後」で「おれ」に向けられた「赤シャツ・野だいこ・狸等」の笑いが、「第一章と末尾」での「おれ」に対する読者の笑いと同質であり、「二章以後」で「赤シャツ・野だいこ・狸等」を笑う読者は、「第一章と末尾」で「おれ」を笑っていたかつての自分をも笑うことになるということである。それは換言すれば、「おれ」にも「おれ」以外の人物にも向けられる「坊っちゃん」の読者の笑いは、その語り手の回想による語りが一貫しない不完全ものであるために生じているということになる。テキストにおける語りの構造と読者との関係を示した点で、小森氏の指摘は重要である。

ここで私は、読者の笑いの二重性が生じる過程で、読者の笑いの対象がスライドすることに注目したい。この場合、「第一章と末尾」

と「二章以後」での語りの位相は、単に笑いについてののみ看取されるべきではないことが分かる。つまり、「二章以後」では「第一章と末尾」と異なり、「おれ」以外の人物に対しての笑いと同時に、「おれ」への共感も少なからず存するということである。

それは例えば、次のような箇所をみても明らかだろう。

けちな奴等だ、自分で自分のした事が云へない位なら、てんで仕ないがい。証拠さへ挙がらなければ、しらを切る積りで図太く構へて居やがる。おれだつて中学に居た時分は少しはいたづらもしたもんだ。然しだれがしたと聞かれた時に、尻込みをする様な卑怯な事は只の一度もなかつた。仕たものは仕たので、仕ないものは仕ないに極つてる。おれなんぞは、いくら、いたづらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるもんか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る。いたづら丈で罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事は御免だと云ふ連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しに這入つてるんだ。学校へ這入つて、嘘を吐いて、胡魔化して、蔭でこせく生意気な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩違をして居やがる。話せない雑兵だ。

(四)

イナゴ事件で生徒を問いただした後の、「おれ」の独白の場面である。「おれなんぞは」以下の箇所に見える「おれ」の独断を讀者が笑えるのは、再読で幾分「おれ」から離れて読む際においてであつて、初読の際はむしろ「おれ」と同一の視点で読む進めていくのではないだろうか。また、先の引用部分が、再読以降の際に必ずしも「おれ」への笑いだけを誘うものでもないだろう。

これに関しては、読書行為における異化作用と同化作用から説明できる。讀者は、異化作用が働くときには登場人物を批評的に、反対に同化作用が働くときには共感を持って、それぞれ読み進めていく。そのため、「坊っちゃん」における「笑い」<sup>7</sup> 異化作用は、「第一章と末尾」では「おれ」に、「第二章以後」では「おれ」以外の人物にも向けられていることになる。このことは、逆説的に言えば、「第二章以後」での「おれ」に対して「笑い」<sup>8</sup> 異化作用が減少した分、共感<sup>9</sup> 同化作用が働きやすいことを意味する。そして、ここで中心となつている現在形や独白めいた讀者への語りかけが、「おれ」への共感<sup>10</sup> 同化作用に拍車をかけるのである。

「坊っちゃん」の讀者は、笑いの二重性と同時に、「おれ」への異化作用と同化作用も経験する。それは、「第一章と末尾」と「第二章以後」での語りの位相というテクストの構造によるものである。

## 二 「清」の語られかた

「坊っちゃん」における「第一章と末尾」と「第二章以後」との語りの位相が、讀者の笑いの二重性と、その内部にある同化作用並びに異化作用とを生み出すことを見てきたが、この語りの位相は、「明<sup>11</sup>、さ<sup>12</sup>と暗<sup>13</sup>、さ<sup>14</sup>という二重性」のポイントとなる人物、すなわち「清」との間にも関係している。

「第二章以後」での「清」は、「おれ」による語りに、さらに彼の回想に登場している。だが、その中での「清」に対する「おれ」の態度・評価には変化が見られる。四国到着から間もない頃は「難船して死にやしないか杯と思つちや困るから、奮発して長いのを書いてやつた。」<sup>(一)</sup> というぐらいであったが、いわゆる新任教師いじめとしての悪戯を認めようとしないう生徒を目の前にして、教職に嫌気がさしたとき、「それを思ふと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい。(中略) 何だか清に逢ひたくなつた。」<sup>(四)</sup> と、急に「清」が思い出されてくる。そして、「単純や真率」を笑う「赤シャツ」を前にして、「こんな時に決して笑つた事はない」ことを理由に、「赤シャツより余つ程上等だ。」<sup>(五)</sup> と「清」の価値が発見されている。これは、「清」の「おれ」に対する「あなたは真つ直でよい御気性だ」<sup>(一)</sup> という誉め言葉に端を発しており、その言葉に逆照射さ

れる形で、「おれ」は自らの生き方を選んでいく。その意味で、有光氏の「真っ直でよい御気性」で「怒がすくなくつて、心が奇麗」であるがゆえに、つねに社会的には「失敗」をもたらした男の「無鉄砲」さは、唯一それを優しく見守る清の存在によって、しっかりと保証されているのである。」という指摘は的を得ている。

この「清」の価値は、「赤シヤツ」に仕組まれた「山嵐」との対立のなか、水代を契機とした金銭の貸し借りをめぐって思考することによって、「おれの片破れ」(六)というところまで上昇する。すでに「真っ直」が自己の美質として自覚されているため、「山嵐」に著ってもらった一銭五厘と「清」に借りている三円とに対する自分の対応は異なるのだと、「おれ」は自分に対して言い聞かせている。その結果、「真っ直」という自己の美質を保証する存在であることから、「清」も「美しい心」の持ち主であるとされ、「おれの片破れ」として認識されたのである。そして、「初手から逃げ路が作つて」あり「自分の方を表向き丈立派にして夫からこつちの非を攻撃する」(十)生徒や「赤シヤツ」のやり方に対処できなくなつたとき、「人があやまつたり詫びたりするのを、真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿」(同)であり、「真っ直」という自己の美質を存続する危うさを感じて、「どうしても早く東京へ帰つて清と一所になるに限る。」(同)と思うようになる。その結果、二度目に手紙を出そうとする際(同)、「今度はもつと詳しく書いて

くれとの注文だから、可成念人に認めなくつちやならない。」(同)と取り組み、また失敗に終わつても「かうして遠くへ来て迄、清の身の上を案じてゐてやりさへすれば、おれの真心は清に通じるに違ない。通じさへすれば手紙なんぞやる必要はない。」(同)という結論に達する。

自己の美質である「真っ直」を保証する存在、またそれゆえに「美しい心」を持つ存在として、「清」が意識されたとき、「野蛮な所」(二)で「不浄な地」(十二)である「四国辺り」(二)にいる「おれ」は、自己存続の危うさを感じ、それを回避するには「どうしても早く東京へ帰つて清と一所になるに限る。」と考えるようになっていた。「清」との一体化が「おれ」の中で達成されていたからこそ「真心」の発想が生じたのである。

これら以外で「清」が語られるのは、二章における「おれ」の夢に出てくる場面と、五章で釣りに飽きた「おれ」が景観の良さから「清」を連れてきたいと思う場面、七章で「うらなり」宅を訪れた際の母親への好感を表す場面、同じく七章で萩野家に下宿を転じた後に「清」から来た手紙を読む場面である。だが、具体的に「清」が想起され語られている箇所は見えてきたとおりである。これらから、この地での数々の経験を通して、「おれ」のなかでの「清」の意味が変化しており、村瀬土郎氏がいうように「おれ」は清と自分との関係を獲得した<sup>19)</sup>ことが分かる。

ここであらためて、「坊っちゃん」における語りに注目したい。語り手である「おれ」は、帰京と「清の死」を経た「現在」から「過去」を語っている。つまり実際には、「二章以後」における「清」についての言説も、すべて「過去」のことである。しかし先ほど見たように、「おれ」が、語る「現在」と語られる「過去」にほとんど無自覚であるために、<sup>11)</sup> 読者は「二章以後」を現在進行の物語であるかのように読んでしまう。加えて、語られる物語の時点ではまだ「清」は生きており、語る「過去」の時間で語っている「おれ」もその意識であるために、「おれ」と同化している読者は、「清は―山下注）車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て『もう御別れになるかも知れません。存分御機嫌やう。』と小さな声で云つた。目に涙が一杯たまつて居る。」(一)や、「汽車が余つ程動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居た。何だか大変小さく見えた。」(同)に垣間見た「清の死」が薄らぐのである。

このことに関して、菅聡子氏による指摘がある。<sup>12)</sup>

さきにふれた未読の読者へ向けられたメッセージ(『新潮文庫100冊(99)』に掲載された紹介文―山下注)と「坊っちゃん」研究の言説との間に落差が生まれる最大の要因は、テクストの最後の部分で与えられる情報、すなわち「清の死」という情報の有無にある。確かに「一」において、すでに清の死は

「おれ」の語りのなかで示唆されている。しかしながら、清の死という情報を携えて「再読」に向かう読者は、初読の読者とは比較にならないほど、「おれ」の語りにちりばめられた清の死を示唆するメッセージ――たとえば「此三円は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたざり、帰さない。今と云つては十倍にして帰してやりたくても帰せない」――に反応することになる。「清の死」という事実なしに「坊っちゃん」を

再読することは、ほとんど不可能であると言つてよい。

菅氏は、「清の死」の薄らぎを、初読と再読での相違として述べている。この見解には、再読の場合においても読者が意識的でないれば「清の死」を忘れる瞬間があることが含まれていないが、「清の死」を読み分け点とする見解は重要である。

### 三 一人称回想と作家の意識

ところで、私は後期漱石テクストにおける回想形式について、以前述べたことがある。写生文の要素として漱石が志向する「客観」が、回想形式にうかがえる語り手と語られる対象との「距離」に見えることを明らかにする試みであった。<sup>13)</sup> 漱石は、「文章一口話」(明治三十九年十一月、「ホトトギス」)や「写生文」(明治四十年一月二十日付「読売新聞」)などで自己の写生文論を明らかにしていき、それらを踏まえつつ自己の写生文を深めている。これらの写

生文論をそのまま明治三十九年四月發表の「坊っちゃん」に直接結びつけるのは執筆時期の点から見て少し無理であろう。しかし、「坊っちゃん」執筆を経てそれらの見解に到達したとも考えられる。今少しその間を追つてみる。

「坊っちゃん」執筆に近い時間での漱石の見解としては、まず次の「文学談」（明治三十九年九月、「文芸界」）が挙げられる。

作者が作中の人物を主観的に書くといふことは、良否は俄に言ひ難いことだがまづくやると、出来上つて見て何うも厭味なものになつて仕舞ふ事があるように考へます。僕は大抵第三者の地位に立つて、客観的に人物を観察する気で書きますが、此方が書きよくもあり、万一出来損なつても厭味がない丈良いやうに思はれます。例へば芝居を見るやうなもので、芝居をやつてゐる役者になつて書いても委しいことが書けやうし、又見物の地位に立つても其光景を写し出すことは出来るが、何方がすきかと云へば、見物になつて、客観的に書いた方が、マジユアライズする方から云ふと遙かによく写し出せると思ひます。

ここで漱石は、「大抵第三者の地位に立つて、客観的に人物を観察する気で書」く、その理由を、「客観的に書いた方が、マジユアライズする方から云ふと遙かによく写し出せる」と言つてゐる。この時期すでに漱石が「客観」に対して意識的であつたことがうかがえよう。

しかし、漱石が「文学談」で示すのはこれだけではない。彼は、「文学は好悪をあらはすもの」であり、そのため「普通の小説の如き好悪が道徳に涉つてゐる場合には是非共道徳上の好悪が作中にあらはれて来なければならぬ」、その意味で「文学は矢張り一種の勸善懲惡であります。」という見解を示した後で、次のようにも言う。

人生観と云つたとて、そんなむづかしいものぢやない。手近な話が、「坊っちゃん」の中の坊っちゃんといふ人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だなと読者が感じて合点しさへすれば、それで作者の人生観が読者に徹したと云ふてよいのです。尤も是程な事は誰にでも分つてるかも知れぬ。つまらぬ人世観である。然し人が利口になりたがつて、複雑な方ばかりをよい人と考へる今日に、普通の人のよいと思ふ人物と正反対の人を写して、こゝにも注意して見よ、諸君が現実世界に在つて鼻の先であらつて居る様な坊っちゃんにも中々尊むべき美質があるではないか、君等の着眼点はあまりに偏頗ではないか、と注意して読者が成程と同意する様にかきこなしてあるならば、作者は現今普通人の有してゐる人生観を少しでも影響し得たものである。然もその人生観が間違つて居らぬと作者の見識で判断し得たとき、作者は幾分でも文学を以て世道人心に裨益したのである。勸善懲惡主

義を文学上に發揮し得たのである。(圏点は本文による。)

前半の傍線部から、漱石が「坊っちゃんといふ人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だな」と「読者が感じて合点」することを望んでいるということが分かる。それは、漱石自身がそのように意図して、「坊っちゃんといふ人物」あるいは「坊っちゃん」というテキストを書いたことを意味する。後半の傍線部にある「こ、にも注意して見よ、諸君が現実世界に在つて鼻の先であしらつて居る様な坊っちゃんにも中々尊むべき美質があるではないか、君等の着眼点はあまりに偏頗ではないか」という語りかけは、作家漱石から読者へのそれでもあるのである。

ここまで見てきたとき、右に見た二つの見解が実は相反することに気が付く。つまり、「作者の人生観(≡勸善懲惡)」を表すことは作家の「主観」を表すことであり、「ゴジユアライズする方から云ふと遙かによく写し出せる」として重視していた「客観」とはかけ離れているということである。自分の志向する「客観」を実現しようとしても、一人称回想による語りにおいてはそれは困難である。まして、主観的な「作者の人生観」をも表すという意図がそこに加わるのであれば、なおさらである。漱石が「客観」と「主観」を意識しながらも、「坊っちゃん」執筆時には深く追求していなかったことが、テキストにおける「第一章と末尾」と「二章以後」と

での語りの位相として表出しているように思われる。すなわち、「第一章と末尾」においては「おれ」が「客観的」に語られるために「笑い」という異化作用が生じ、「二章以後」では「主観的」に語られるために共感という同化作用が生じているのである。

「文学談」には、漱石の「坊っちゃん」執筆時の意識が幾分か表れていると思われる。それは、「坊っちゃん」発表直後に読評の札として出された「大谷繞石宛書簡」(明治三十九年四月四日)にある、「僕は教育者として適任と見做さる、狸や赤シャツよりも不適任なる山嵐や坊っちゃんを愛し候。大兄も御同感と存候。」ともつながるものでもある。

#### 四 〈拡大鏡〉としての「文学論」

「坊っちゃん」における「第一章と末尾」と「二章以後」での語りの位相は、「文学談」で漱石が示した「客観」と「作家の人生観」≡「主観」との併存によるものであり、そのため、語る「現在」からの一貫した回想という点では失敗している。そして同様の状況は、「坊っちゃん」と同じ一人称回想形式を採る「坑夫」(明治四十一年一月―四月)においても見受けられる。確かに、「現実の事件は済んで、それを後から回顧し、何年前前のことを記憶して書いてる体となつてゐる。」「昔のことを回顧すると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も同じやう

な眼を以て見て書ける。」(漱石「坑夫」の作意と自然派伝奇派の交渉)、明治四十一年四月、『文章世界』とあるように、「坑夫」での回想形式に関してほど、「坊っちゃん」においても漱石が意識的であったとは必ずしも言えないだろう。しかし、「坊っちゃん」を経ることによって、漱石は「坑夫」において回想という手法に自覚的であり得たと考えられないだろうか。そして、その手がかりとなると思われるのが、両テクストの間に書かれた「文学論」(明治四十年五月、大倉書店)である。

「文学論」第四編に、「間隔論」と題された章が存する。その具体的展開に際し、漱石は「篇中の人物の読者に対する位地の遠近を論ずるものとす。」と規定し、作中人物と読者との距離、すなわち作中人物が読者に対して異化もしくは同化を伴って見られることを述べている。そしてその後、「千里を隔て、百年を隔て、故紙上に之を読む何等の興味なし。時間もしくは空間の隔りを払つて之を現代に移すか、又は自国に運び来るかに因りて幾分の活気を添ふ。」と、作中人物と読者との時間的、空間的な「間隔」について論じている。漱石は、歴史的「間隔」については「此他(歴史的現在の叙述——山下注)に時間を短縮し得るの良策あるや否やは未だ考へず。」としているが、空間的「間隔」については多くの言を費やしている。そこでは、空間的「間隔」に対して、「其著者と吾人読者とは亦一定の間隔に立つが故に、吾人と篇中の人物との間には二重

の距離を控へたる」と、(作中人物—作者—読者)の図式を想定する。作品内容や作中人物を読者に紹介するのが作者である、という認識である。そして、著者を通じて作中人物を知るのは弊害があるとして、「著者の影を隠して、読者と篇中の人物とをして当面に對坐せしむる」、すなわち作者の立場について言及していく。その論旨を追う。

之を成就するに二法あり。読者を著者の傍に引きつけて、兩者を同立脚地に置くは其一法なり。此時に當つて読者の目は著者の目と合し、其耳亦著者の耳と化するが故に、かれの存在は毫もわが聡明を妨ぐるに足らずして、二重の間隔は短縮して其半ばを減ずるに至る。或は読者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して独存するの痕跡を留めざるが如き手段を用ふ。此時に當つて其著者は篇中の主人公たり、若しくは副主人公なり、もしくは篇中の空氣を呼吸して生息する一員たり。従つて読者は第三者なる作家の指揮干渉を受けずして、作物と直接に感觸するの便宜を有す。

まず漱石は、作家の立場として、「読者を著者の傍に引きつけて、兩者を同立脚地に置く」場合と、「或は読者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して独存するの痕跡を留めざるが如き手段を用ふ」場合という二つを設

定する。そして、「此二方法は実に作家の作物に対する二大態度を示す」とし、続けて次のようにいう。

第一法を用ゐたる作物を批評的作物と名づけて第二法に違ふものを同情的作物とし以て一切の小説類を二大別するを得べき方法たればなり。批評的作物とは作家篇中の人物と一定の間隔を保つて批判的眼光を以て彼等の行動を叙述して成るを云ふ。此方法によりて成功せんとせば作家自からに偉大なる強烈なる人格ありて其見識と判断と観察とを読者の上に放射し、彼等をして一言の不平なく作家の前に叩頭せしめざるべからず。(中略) 同情的作物とは作者の自我を主張せざるの作物を云ふ。たとひ自我を主張するも篇中の人物を離れて、主張すべき自我なきを言ふ。換言すれば両者の間に間隔の認むべきなくして、同情の極油然として一所に渾化せるを云ふ。此方法によりて成功せん為めには作家必ずしも篇中人物の行為動作を批判し好悪するの見識と趣味とを要せず、第三者の位地に超然として公平なる判官の態度を嗜好の上に維持するを須ひず。只篇中の人物と盲動すれば足る。

一所に渾化せる」と、その性質を説明している。このように述べた後、「形式的間隔論をなさんが為めに挙げたる二方法は是に於てか逆行して作家の態度となり、心的状況となり、主義となり、人生観となり、発して小説の二大区別となる。」とまとめてゐる。

漱石が作家の立場として考察したのは、「読者を著者の傍に引きつけて、両者を同立脚地に置く」「批評的作物」と、「或は読者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して独存するの痕跡を留めざるが如き手段を用ふ」「同情的作物」の二つであつた。「批評的作物」の場合は、作家自身が批判的であるために読者も作中人物に対して批評的になり、反対に「同情的作物」では、作中人物と「融化」した作家を通して作中人物を把握するために同情的になるといふ。そしてこの二つの方法は、「作家の態度」「作家の心的状況」「作家の主義」「作家の人生観」になると結論づけてゐるのである。

かくて、「間隔論」で示されたのは、「批評的作物」「同情的作物」の二つの方法が、「作家の態度」「作家の心的状況」「作家の主義」「作家の人生観」といふ作家の立場に関わつてゐるといふ認識である。特に、「作家の態度」「作家の心的状況」「作家の主義」「作家の人生観」といつた言説が「写生文」や「文学談」にも使用され、それらの見解が彼が写生文の要素として重視した「客観」について論じたものであることから、この「間隔論」

が漱石の写生文実現のために大きく影響していることがうかがえよう。<sup>16</sup>  
内田氏もこの「間隔論」に触れて、「批判的作物」の概念が「吾輩は猫である」の人間批判者としての「猫の眼」の設定にマッチしているのと同様に、「坊っちゃん」はここで言う「同情的作物」に最も適合したものと言えるかも知れない。」としつつ、次のように述べている。<sup>17</sup>

この一節は「坊っちゃん」における仕組みを説明する意図で書かれたかと思われる程この作品に適合するものである。「文学論」が出版されるのが明治四十年五月で、その原稿整理が三十九年秋なされており、その際「間隔論」の部分は、漱石が加筆を大幅に行なった部分の一部に当たることを考えれば、その際「坊っちゃん」は漱石の念頭の少なくとも一部にはあつたことになる。その点を拡大して言えば、この一節は「坊っちゃん」の主人公の性格規定にも符合する一面を持つている。

内田氏が言うように、漱石が「坊っちゃん」を念頭に置きながら「間隔論」を書いた可能性は否定できない。だが、漱石は同時期に「文学談」も表しており、ここでは「客観」と「作者の人生観」の二つが示されている。そして、「坊っちゃん」においてその二つが併存しているために語りの位相が生じていたのであるから、一方の「同情的作物」のみを重視できないのではないか。また、「間隔論」中のもう一つの要素である「批評的作物」について、内田氏は「吾

輩は猫である」に類似点を見出しているが、先ほど触れた「坑夫」の作意と自然派伝記派の交渉との連関の方が強いのではないか。そして、「文章一口話」や「写生文」といった漱石の写生文論が、「坊っちゃん」と「文学論」の間に位置することも看過できない。「坊っちゃん」における「客観」と「作者の人生観」を「文学談」で示し、それを自己の写生文の問題として捉えたが故に、「文章一口話」「写生文」などを著し、また一方で「坊っちゃん」を批判的に「間隔論」で整理した上で、「坑夫」へとつなげていったと考えるのが自然である。「坊っちゃん」を経たことで、自己の写生文論を深められ、「坑夫」において方法に自覚的であり得たのであろう。

#### おわりに

「明るさ」と「暗さ」という「二重性」は、「坊っちゃん」に存在する、「第一章と末尾」と「二章以後」との語りの位相によるものである。それは、読者の「おれ」への異化作用と同化作用とを誘い、笑いの「二重性を引き起こしている。そして、この語りの位相は、「明るさ」と「暗さ」という「二重性」のポイントとなる人物すなわち「清」にも関連し、「二章以後」の「清」との関係を現在進行形のように語る「おれ」に読者を同化させ、「第一章と末尾」に垣間見た「清の死」を希薄化する。その結果、「明るさ」と「暗さ」とそれぞれに偏る

読みが提示されてきたのである。

また、「坊っちゃん」に無意識に採られた一人称回想という方法は、「文学談」において漱石がいう「客観」と「作家の人生観」<sup>11</sup>「主観」の現れであり、「文章一口話」や「写生文」といった写生文論へと受け継がれた。また同時に、「文学論」中の「間隔論」にある「批評的作物」と「同情的作物」として整理、再認識され、その応用が「坑夫」で試みられたのである。

漱石は、写生文の実践において常に「客観」を重視していた。しかし、「坊っちゃん」においては、「客観」と相反する「主観」もつかえる。「主観」を免れない一人称回想において「客観」を実現するのは困難であり、その区別が不十分であったかも知れないが、「坑夫」へ至る時期の漱石には、「主観」の要素を含んだ大括りとしての「客観」という認識があったと考えられるのである。<sup>18</sup><sup>19</sup>「坊っちゃん」というテキストが、漱石が写生文への見解を深めていく契機として機能していたからではないだろうか。

注

(1) 平岡敏夫「坊っちゃん」試論——小日向の養源寺——(昭和四十六年一月、「文学」)『坊っちゃん』の世界(平成四年一月、塙書房)所収

(2) 同時代の論究では、「おれ」を「さわやかな直情径行型の行動人」と説く相原和邦氏「坊っちゃん論」(初出昭和四十八年二月、「日本文学」)『漱石文学の研究』(昭和六十三年二月、明治書院)に所収が挙げられ

よう。しかし、相原氏の見解は、「明るさ」を重視する立場に留まっていない。

(3) 有光隆司「坊っちゃん」の構造 悲劇の方法について」(初出昭和五十七年八月、「国語と国文学」)『夏目漱石Ⅲ・日本文学研究資料叢書』(昭和六十年七月、有精堂)所収

(4) 内田道雄「諷語と笑いと——坊っちゃん論」(昭和五十一年十一月、「国文学」)

(5) 小森陽一「表裏のある言葉——坊っちゃんにおける(語り)の構造——(上)(下)」(初出昭和五十八年三月、四月、「日本文学」)『構造としての語り』(昭和六十二年四月、新曜社)所収

(6) ここでいう「異化作用と同化作用」は、読者の文学テキスト中の人物との距離(重なり/度合い)の意味で用いる。ロシア・フォルマリズムでいうところの「異化」とは異なることを付言しておく。

(7) ミハイル・バフチンは、「叙事詩と長編小説——小説研究の方法論について」(初出1941年、引用は「ミハイル・バフチン著作集7 叙事詩と小説」(昭和五十七年二月、川端香男里/伊東一郎/佐々木寛訳、新時代社)に拠る)において、「笑いは対象を不法な接触の領域に導き入れるが、そこではその対象を四方八方から無遠慮に触ってみることができ、引っくり返し、裏返しにし、上や下からのぞき、その外枝を破り、奥をのぞきこみ、疑い、分解し、分割し、むき出しにし、暴露し、思いのままに探求し、実験することができる」と言う。またこれに関して、桑野隆氏は「バフチン」(対話)そして「解放の笑い」(昭和六十二年一月、岩波書店)の中で、「笑い」による世界の異化」と述べている。

(8) 厳密に言くと、テキストは一人称回想形式をとっていることから、「清」は「第一章と末尾」でも「おれ」というフィルターを通して語られていることになる。しかし、ここでは「清」の発言や行動が直接的に語られ

しており、「二章以降」のような単に回想されるだけの存在ではないことは区別できよう。

(9) 注3参照。

(10) 村瀬士郎「世の中」の実験——「坊っちゃん」論——(昭和六十二年九月、「国語国文研究」第七十八号)

(11) テクストには、「(前略)なまじい、おれのいう通になつたのでとう／＼大変な事になつて仕舞つた。夫はあとから話すが、(後略)」(二〇)という語り手である「おれ」が語る「現在」に戻っていることを示す表現がある。

(12) 斎藤子「坊っちゃん」をへ読むこと(平成十一年十月、「漱石研究」第十一号、翰林書房)

(13) 拙稿「回想」と「写生文」——後期漱石文学試論——(平成十年十一月、「近代文学試論」第三十六号)。また、漱石が「客観」について意識的であったことは、「写生文」や、「客観描写と印象描写」(明治四十三年二月一日付「東京朝日新聞」)などからうかがえる。前掲の拙稿、並びに「漱石の写生文と同時代——虚子と自然主義、その様相——」(平成十一年十二月、「近代文学試論」第三十七号)参照。

(14) 前後に特定の作品を指す言説がうかがえないことから、一般的な小説ととって差し支えないと思われる。

(15) この点に関しては、小森陽一「出来事としての読むこと」(平成八年三月、東京大学出版会)に詳しい。小森氏は、「坑夫」の作意と自然派伝記派の交渉」に見られる作者の意図は実現されていないと説く。拙稿「回想」と「写生文」——後期漱石文学試論——(前掲注12)でも扱っている。

(16) 佐藤泰正「初期漱石における〈語り〉の問題——方法としての〈余〉を軸として」(平成三年十一月、「日本文学研究」第二十七号)も、写生文と「間隔論」の関連を指摘する。だが、佐藤氏は、「自転車日記」や

「吾輩は猫である」、「漢虚集」などにおける語りと写生文については論じているが、「坊っちゃん」との関わりは強く意識されていない。

(17) 注4参照。

(18) 注15参照。

(19) 「坑夫」前後の漱石の意識については、拙稿「漱石の写生文と同時代——虚子と自然主義、その様相——」(前掲注13)で述べている。

付記

「坊っちゃん」や「文学論」、及び漱石の評論は、全て「漱石全集」(平成五年十二月〜十一年三月、岩波書店)に拠る。

——やました・こうせい、本学大学院博士課程後期在学——